

# 職人文化の残るまちへ

ひとまち



参加者が見守る中に行われた  
削り初めて競技が始まりました



全国削ろう会川越大会



大鉋による薄削り  
鉋だけでもかなりの重さです



尺爪を吹きながら  
鉋をかけています



計測結果はなんと3マイクロ  
3ミリの1000分の1です



薄削りした鉋屑  
(上)は絹のような  
手触り。削ったあ  
との木材(下)は、  
ガラスのようにピ  
カピカ。



多くの参加者が耳を傾けた研ぎ講習



ゆっくり慎重に引きます

20年以上愛用している鉋で、川越から参加した島崎満雄さん。「初めて参加しました。無心に鉋をかけることができて楽しかった。また参加したいですね」。



ひもを巻くと  
人形の鉋からも鉋屑!?



台を黒御影石で作った  
鉋の切れ味に興味津々

「削ろう会」は、日本の伝統的木工技術を次世代に継承し、それぞれが持てる技術を競い、楽しみながら習練・向上するため、平成9年に発足しました。年に一回程度開催される全国削ろう会は、鉋屑の薄さを競う「鉋薄削り競技」がメインイベント。自慢の鉋と厳選した木材を持ち寄り、楽しみながらも真剣に競い合っています。

9月10日・11日、川越運動公園で行われた鉋薄削り競技には、四百四十九人が参加。二日間で約八千人が来場しました。また、サテライト会場となった鍛冶町広場(仲町)でも、さまざまな体験を実施。実行委員長の原知之さん(幸町)は「この大会を機に、職人文化を継承する川越を創造したいですね」。会場には参加者の熱気と木の香りが、いっぱい広がっていました。



\*⊕はサテライト会場でも撮影しました。



台切り大鋸「よいしょ、よいしょ」



前挽き大鋸での丸太挽き



鉋屑でアードフラワー



小屋組み体験



競技者を越えられるか？親子で薄削り体験



たたら製鉄の実演には川越工業高校の生徒も参加(左)。木の葉鋸体験には、初雁賞を受賞した鋸鍛冶・伊藤守さんが参加(右)。



### ●昭和26年4月20日

全戸配布する形の「川越市政だより」第一号の発行日です。それまでの「川越市公報」は、市の掲示板にはり出す形でした。そこで、市政を市民の目の届くものとし、市政と市民の皆さんの結びつきを強めるため、毎月一回市内全世帯に配布することにしました。タブロイド版(新

### ひとまち

## 六十年目の広報川越

### これまでも、これからも

聞紙の半分程度の大きさ一枚の両面刷りから、川越市の広報は始まりました。

### ●昭和41年4月10日

この号から名称が「広報かわごえ」に変わり、ページも四ページと倍増。翌年に現在の名称である「広報川越」に変わりました。情報の増加に伴い、昭和43年4月からは、毎月10日と25日の月二回発行になります。同44年4月からは、タブロイド版からA4版に。こうして現在の広報の形が出来上がりました。また、同42年ごろから「声の広報」が、同47年から「広報川越点字版」が始まりました。

### ●平成13年2月10日

この年は広報川越五十周年を迎えた年で、広報川越一〇〇〇号の発行日。このころは投書コーナーが充実していました。旅行記を掲載する「旅の空から」や「イラストコーナー」など。その後平成15年に中核市となつた川越。業務の増加とともに情報量はますます増えてきました。このころから25日号はお知らせ中心に、10日号は読み物中心になりました。

### ●平成23年10月10日

インターネットの発達により、ホームページやモバイルサイトからの情報発信は、もはや常識です。さら

に、ツイッターやブログといった新しい情報伝達手段が出現。東日本大震災の際、電話などが使えない中これらが活躍したことを契機に、存在価値が増してきています。

これからの広報は、さまざまなメディアを活用した、多角的なものとなる必要があります。例えばスピードが求められる情報はインターネット、じっくり読んで欲しい情報は紙の広報といったように、情報の性格に応じて、メディアを使い分けていくと考えています。これまでも、これからも、市民の皆さんと行政をつなぐ懸け橋となるために……。